
あなたというから

アサルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたというから

【Nコード】

N8553P

【作者名】

アサルト

【あらすじ】

死にたがりの女子高生・神宮寺カナコと、PDDの及川ミズキの出逢いの物語。

私は生まれる世界を間違えた。

あるいは、人として生まれた事がそもその間違いだった。

私はこの世界に適応出来ない。

表向きは平和で豊かで、しかし欺瞞に満ちたこの世界に嫌悪感を抱いている。

生きる事が面倒くさい。

辛いとさえ感じる。

変わらない日常に嫌気がさす。

くだらない生活に苛立ちを覚える。

理不尽で不条理で不合理な世界に吐き気がする。

私はこの世界に生まれてくるべきではなかった。

そう思わずにはいられない。

そう考えずにはいられない。

そう、私は

×

×

×

あなたといるから

「…………死にたい」

少女はそう呟いた。

つややかな長い髪は腰まで届くほど長い。肌の色はやや白く、瞳の色は黒い。整った顔立ちは可愛いというよりは綺麗だと評されるだろう。

神宮寺カナコ。

十六歳の高校一年生。

だが、その雰囲気は気^け怠^{だる}く、世間一般に持たれる女子高生のイメージからは程遠い。

眠たそうに目を半眼にし、学校の屋上で手すりにもたれかかっている。

風景を眺めているわけではない。

彼女の目は遠くを　　ここではないどこかを見ようとしていた。

「また始まったよ、カナコの『死にたい』が」

そう言ったのはカナコの隣に居た少女だ。

黒い髪は耳が隠れるくらいのショートカット。どこか余裕のある表情をしており、人懐っこい雰囲気がある。カナコと同じデザインの黒いセーラー服をラフに着崩しているが、だらしない感じはしない。

及川ミズキ。

カナコの同級生にして、唯一、彼女の友人と呼べる存在である。

「そんなに死にたきや、死ねばいいじゃない？ それとも私の気を引きたくて言ってるのかな？」

明るい口調で言うミズキ。

「……………」

対するカナコは無言で遠くを見ているだけだ。

ミズキは嘆息して、友人の横顔を眺める。

カナコは美人だ。同性のミズキが憧れるくらいに整った顔つきをしている。これで愛想が良ければ間違いなくもてるが、彼女はクラスで浮いていた。ミズキ以外とまともに会話をしている場面など見た事が無い。

とにかく無愛想で取っ付きにくい、他人を寄せ付けけない雰囲気がある。

そんなカナコだから、自然とクラスからは孤立していった。

学校が始まってひと月もすると授業にも出なくなった。学校には来ているのだが、たいていの時間は屋上で黄昏^{たそがれ}ている。

日がな一日、遠くを眺めてはため息を漏らしている。

その姿が美しかった。

だからミズキはカナコに興味がわいた。始めはただの好奇心だったのだが、気がつけば彼女と一緒に居るようになった。

無論、ミズキは授業には出ているので、カナコと過ごすのは昼休みや放課後だけだ。会話らしい会話は無い。ただミズキはカナコの隣に並ぶだけ。

そのわずかな時間に必ず一度はカナコが呟く　『死にたい』と。

付き合い始めた頃はその理由を訊いたりもしたが、カナコは応えなかった。

ミズキもそれ以上、言及しなかった。

その一線を超えてしまったら、カナコとの関係が終わってしまう様な気がしたから。

生きる事に意味が見出せなくなったのはいつからだっただろうか。
気がつけばカナコの心は病んでいた。

この世界の在り方に疑問を持つ様になった。

他者という存在に不信感を抱く様になった。

自分という存在に違和感を感じる様になった。

ひどい虚無感と虚脱感に苛まれる様になった。

憂鬱で無気力な少女になった。

だからあの日、カナコは屋上から飛び降りる積もりだった。

高校生になっても何も変わらなかったから。

おそらくこの先ももう何も変わらない。

退屈で変わらない日常の繰り返し。

そう思うと気が狂いそうだった。

だから死のうと決めた。

しかし……。

「ねえ、何してるの？」

場違いに明るい声にカナコは振り向いた。そこにはカナコと同年代であるう少女が居た。

耳が隠れるくらいの黒髪のショートカット。美人とは言えないまでも、愛嬌のある可愛らしい顔つきをしている。

カナコはその少女に見覚えがあった。確かクラスメイトだったと思うが、名前は思い出せない　　というか知らない。

「及川ミズキ　ミズキでいいよ、神宮寺カナコさん」

カナコの思考を読んだかの様に、及川ミズキは名乗った。

「もしかして、飛び降りるところだった？」

ミズキにしてみれば冗談だったのだろうが、少しでも空気の読める人間であれば、そんな事は言えない雰囲気だ。そういう意味では、ミズキは空気の読めない少女だった。

無視してもよかった。普段であればそうしていた。

「……ええ。だったら何？」

だが、カナコはミズキの問いかけに応えた。

理由は判らない。ただの気まぐれだったのかもしれない。

対するミズキは、

「うん、別に？　ただ、ここから落ちたら痛そうだって」

と、やはり場違いな様子で言った。

「……………」

この少女は馬鹿なのではないか？ カナコはそう思った。

「ここから落ちたら、痛いじゃ済まないわ」

「そうだよな。下手したら死んじゃうかも」

ミズキはカナコの隣に並ぶと、手すり越しに地上を見下ろした。

「もしかして、死のうとしてたの？」

今気がついたとばかりにミズキは訊いてきた。

やはりこの少女はどこかおかしいに違いない。この状況で他に何の目的があつて飛び降りなどするのか、考えるまでもない。

「あ、変なこと言つてたらごめんね。私、病気があつて、時々、変なこと言つちゃうらしいの」

ミズキの言葉にカナコは一瞬だが戸惑った。

これは後になって知った事だが、ミズキは広汎性発達障害（PDD）と呼ばれる精神疾患を患^{わづ}つていた。

ミズキの妙な言動の原因に納得がいったと同時に、カナコは激しい怒りを覚えた。

どうして人間は平等ではないのだろうか？

どうしてカナコのように厭世観を持つ者や、ミズキのように障害を持つ者が生まれるのだろうか？

答えは判っている 『生贄』だ。

知恵を得た人間は同時に『嫉妬』や『傲慢』という感情も知ってしまった。

いわゆる『七つの大罪』である。

常に人間は自分より劣っている者を見下して心の平穏を保っている。

無自覚にだ。

『生贄』になる者 犠牲無くして人間の社会は成立しない。

神は何故そんな風に人間をつくった？

神などいなくてもいい、何故そんな風に進化した？

カナコの怒りはそういうものに向かっていた。

「どうしたの？ 怖い顔してる」

ミズキは平然と訊いてきた。

それがカナコの癪に障った。

「あなたは腹が立たないの!? そんな風に生まれてきて」

そこまで言っで、自分がひどく残酷な事を言おうとしている事に気付いた。

これでは無神経に生きている他の人間と変わらない。

「え……何が？」

そんなカナコの心情には気付きもせず、ミズキはきょとんとしている。それがカナコは許せなかった。

だから

「この世界の何もかもよ　ッ！」

激昂した。

自分で自分が抑えられなかった。

これではただの八つ当たりだ。

なのに

「ごめんね。私のせいで怒ってるんだよね？」

と、ミズキは謝った。

悲しそうな目をして、カナコを見上げた。

「ごめんなさい。だから、泣かないで」

「!？」

カナコは泣いていた。知らずに涙を流していた。

おかしい。何故、自分は泣いているのだろうか？

判らない。

悲しくなどないはずなのに……。

そうしてカナコが立ちつくしていると、ミズキは何か思いついた様に、カナコの両手を包み込むように握った。

優しく。慈しむ様に。

カナコは不思議な気分になった。ささくれ立っていた気持ちが穏やかになる。

誰かと手をつないだのはどれくらいぶりだろう　そんな事を考える。

「……あなたの手は温かいわね　ミズキ」

自然とミズキのことを名前で呼んだ。

「私、体温が高いんだ」

ミズキは誇らしげに言った。

「ねえ神宮寺さん、私もあなたのことカナコって呼んでいい？」

「……別に、好きにすればいいわ」

「うん。ありがとう カナコ」

何か気恥かしくなって、カナコはミズキから視線をそらした。

これがカナコとミズキの出逢いだった。

それから毎日、昼休みと放課後は屋上で二人一緒に過ごした。

他愛のない事を話した。

何も話さず、ただ一緒にいることもあった。

会話が無くても、それを気まずいとは感じなかった。

いつしか、二人でいるこの空気が心地良くなっていた。

だがそれでも、カナコの厭世観からくる『死にたい』という衝動

は消えない。

だからカナコは会話が無くなると「死にたい」と思いついた様に呟く。

ミズキももう慣れたもので「死ねば？」と軽く聞き流す。

「本気にしないでしょ？」

「え、本気だよ？」

「……ミズキは、私が死んでもいいんだ？」

「よくはないけど……カナコが死んだら、私も一緒に死んであげるよ」

「まるで殺し文句みたいね」

「ほれてくれてもいいよ？」

「馬鹿じゃないの？」

「うん。馬鹿みたいだね、私達」

そうして、どちらからともなく笑った。

何がおかしかったのかは判らない。

ただおかしかった。

だから笑った　馬鹿みたいに。

「ねえ、カナコ」

ひとしきり笑うと、ミズキが意を決したように言った。

「もうすぐ夏休みじゃない？　その前に少しだけでも、教室に来てみない？」

「……………」

ミズキの言葉にカナコの表情が曇る。

「無理にとは言わないよ。駄目だと思ったら出ていけばいいし」

ミズキの表情はいつもと変わらない。空気が変わったことなど気付いてもない。

否、気付いていない振りをしているのではないか？　ミズキと付き合うようになって、いつしかカナコはそう思う様になった。

他人の顔色をうかがっていないければ生きていけないこの世界で、それはとても危うい生き方だ。にも関わらず、ミズキはそれをしない。

あるいは出来ない。

カナコは急にミズキの事が心配になった。ミズキは教室で上手くやっていけているのだろうか？

だから

「……………考えておく」

そう、ぽつりとカナコが呟いたのをミズキは聞き逃さなかった。

「本当に？ 来てくれるの？」

まるで自分の事の様に喜ぶミズキ。何がそんなに嬉しいのだろうかとカナコは理解出来なかった。

「だから、考えておくだけだって」

「待つてるから！ 絶対だよ！」

カナコの言葉に被せる様にミズキはまくし立てた。

「じゃあ、明日ね！」

そう言ってミズキはカナコの返事も聞かずに帰った。

夕焼けが照らす気怠い雰囲気にとひとり残されたカナコは途方に暮れた。

翌日、カナコは教室に向かう決心をした。ミズキの言う様に、駄目だと思っただけなら出ていけばいい。それくらいの気持ちだった。

校門を通り、靴を履き替え、1年生の校舎に向かう。

『1 A』と掲げられた標識の教室にたどり着く。

すると、「おはよう！」と声をかけられた。

ミズキだ。

「……もしかして、待ってたの？」

カナコの問いにミズキは満面の笑顔で応えた。

「待ってるって言ったじゃない」

そう言われてしまうと二の句が継げない。

「それに席替えしたから、場所が判らないと思って」

「……どこ？」

ミズキの配慮が嬉しくて、しかし『ありがとう』と言えるだけの素直さもなく、カナコはぶっきらぼうに訊ねた。

「窓際の私の席の後ろだよ」

ミズキがカナコの手を引く。

そして

「おはよう！」

と、大きな声で教室に入った。

「ちょ」

止める間もあればこそ ミズキの声は教室中に響いていた。

教室に居た生徒達の視線がミズキに集まる。

「おはよう、ミズキ」

「及川さん、声でかいよ」

「なんで朝からそんなに元気なんだ？」

そんな暖かい声がミズキを迎えていた。

「……………」

ひょっとしたらミズキも自分と同じようにクラスで浮いているのではないか？ そう思ってカナコは教室に来る気になったのだが杞憂だったようだ。

それならそれでいい。ミズキが嫌な目にあっていなければそれで良かった。

だから自分がどんな態度で迎えられるかはどうでもよかった。

やがて生徒達の視線がカナコに向いた。

教室がざわめく。三ヶ月近く教室に来ていなかったクラスメイトが急に現れれば驚きもするだろう。

当然の反応だ。

予想は出来ていた。だからカナコは気にした風もなく、平静を装った。

さすがにミズキもこの場でカナコをクラスメイト達に紹介したりはせず、すぐに自分の席に座った。

カナコもその後ろの席に座る。

落ち着かない。ここは自分の居場所ではない。

そんな気持ちが湧き出てくる。

教室に居る生徒全員がカナコを見ている様な気がする。

その視線に悪意がある様な気がする。

そんな被害妄想にも似たネガティブな感情に流されそうになる。

だが、そんなカナコを気遣って いや、そんな気遣いが出る少女ではない ミズキが振り返って話しかけてくる。

普段通りに。

変わることなく。

どうでもいい様な話を楽しそうに。

そんなミズキを見ていると心が落ち着いた。

だからカナコは、今日一日ぐらいなら彼女に付き合っ
てやるのも悪くない　そう思った。

放課後。

カナコとミズキはいつも通りに屋上に居た。

「今日はどうだった？」

ミズキが問うてくる。

「……別に、どうってことはないわ」

カナコが淡々と応える。

事実だ。何も問題は起きなかったし、起こすことも無かった。

ただ、その日ミズキは終始楽しそうだった。

だから

「じゃあ、明日も来てくれる？」

というミズキの言葉に、

「……考えておく」

とカナコは応えた。

「うん。待ってるからね」

「考えておくだけよ」

ミズキの言葉に、カナコはやはり不機嫌そうな口調で応えた。

厭世観はそう簡単には無くならない。

理不尽で不条理で不合理な世界が好きにはなれない。

それでも

「ねえカナコ　私、あなたのことが好きだよ」

「…………馬鹿じゃないの？」

それでも、二人でなら。

きっと世界は違って見える。

変わらないものなど無いのだから。

FIN

（後書き）

理想の『友情もの』のひとつってこんな感じです。どうも、アサルトです。

故あって書いたものなのですが、せつかくだからと発表してみました。

どうでしょう？

どうと言われても困るでしょうが。まあ、魔が差したと思ってください。

そして、よろしければ感想をください。

苦言でも結構です。

それでは読んでくださった貴方に感謝を。

ツンデレっばい死にたがりの女の子は好きですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8553p/>

あなたというから

2011年1月8日22時44分発行